

清泉女子大学キリスト教文化研究所年報 第26巻 平成30年

Journal of the Research Institute for Christian Culture, Seisen University, Vol. 26, 2018

書 評

Book Review

中西恭子『ユリアヌスの信仰世界——万華鏡のなかの哲人皇帝』

慶応義塾大学出版会，2016年，本文277頁＋索引・註・参考文献88頁

背教者ユリアヌス（Flavius Claudius Julianus, 331/2-363年，皇帝在位361-363年）。彼の生涯は，すでに，辻邦夫による小説『背教者ユリアヌス』（中央公論社，1972年）によって魅惑的かつ情感豊かに描かれており，日本では悲哀に満ちた苦渋を噛みしめた不遇なる人物として，つとに知られている。評者も高校時代に密やかな憧れをもって，この人物像を受容したことを，いまにして懐かしく想い出す。しかし，実際のところ，ユリアヌスの人物像は歴史的にはどのようなものであったのだろうか。中西恭子の研究が優れた視座を示している。つまり，中西はユリアヌスの抱えていた苦悩によって醸成された独自の信仰世界の意味を，古典的な諸文献をもとにして繊細かつ鮮やかに解き明かしてみせた。

しかも，中西はユリアヌスに同情を寄せて一方的に判官鼻厩することは決してしない。むしろ，同時代のキリスト教側の鋭利な論客たちの見解をも詳細に検討してユリアヌスに対峙させている。その意味で，異なる複数の見解を同時に俎上に載せて料理しているような俯瞰の仕方が中西の研究成果の真骨頂となっている。これほど客観的で冷静な研究姿勢が他にあるだろうか。歴史学者・文献学者・精神思想史研究者としての中西の力量は本物であるだろう。

それにしても中西の新著を過不足なく批評することは，かなり難しい。なぜならば，中西の本の書き方が，あまりにも様々な研究分野の知見を複雑に組み合わせた記述となっているため，一筋縄では論じられないからである。そこで，今回は，いささか心に響いた印象だけを軽く書き流すに留めたい。評者の怠慢を，どうか御寛恕いただきたい。

ところで，本書の構成は，以下のとおりである。「はじめに——天変地異とユリアヌス」，「第1章 万華鏡のなかの哲人皇帝」，「第2章 幻影の文人共同体を求めて——単独統治期以前のユリアヌスの精神的形成」，「第3章 理想の潰走——ユリアヌスの宗教

政策とその具現化の過程」,「第4章 ユリアヌスの信仰世界Ⅰ——現状の認識 悪しきミュートスを語る者たち」,「第5章 ユリアヌスの信仰世界Ⅱ——理想国家の宗教」,「第6章 理想化されたギリシアへの当惑——ナジアンゾスのグレゴリオスのユリアヌス批判」,「おわりに——万華鏡のなかの哲人皇帝, ふたたび」. 次に, それぞれの章の内容を概観しておこう.

「はじめに」と「第1章」とは, ユリアヌスの歴史的データの整理となっており, どのように研究をすることが可能かが示されている.

本格的な精神的な叙述は「第2章」から始まる. 中西は, イアンブリコス派新プラトン主義者としてのユリアヌスの学習傾向を丹念に洗い出す. そして, 「第3章」ではアンミアヌス・マルケリーヌスやナジアンゾスのグレゴリオスによるユリアヌス批判の動向を紹介し始める.

「第4章」(ユリアヌスにとっての帝国の現状認識) および「第5章」(ユリアヌスにとっての帝国の設計図) はユリアヌスの信仰世界を問い直す. 「第4章」がユリアヌス個人にとっての帝国における現状認識に焦点を当てているとするならば, 「第5章」は理想国家における宗教の在り方に視点を移している. 言わば, ユリアヌスにとっての将来展望の設計図が示されている. これら二章を費やして描かれていることは, 「ユリアヌスにとっての」現在理解と未来展望とであるので, 結局はユリアヌスの信仰世界は現状認識から将来展望への独りよがりの道行きに過ぎないという限界性そのものである. ユリアヌスの哀しみの原因としての狭隘なる信仰世界を活写してみせた中西の手腕が如実に発揮されている.

「第6章」および「おわりに」では, ナジアンゾスのグレゴリオスのユリアヌス批判に集中するかたちでの独自の眺めが浮き彫りにされている. つまりは, 正統なキリスト教側からのユリアヌス批判の模範例としてグレゴリオスの論説が子細に検討されてゆく. ユリアヌスとは対置される立場のオピニオン・リーダーの見解が「第6章」には集約されて詰まっている. ユリアヌスの限界や欠点を単に意地悪く羅列するわけでは, まったくないナジアンゾスのグレゴリオスのキリスト者としての矜持が正確に活写されている. キリスト教思想史に関しても造詣が深い中西だからこそ描けた章なのである. 「おわりに」ではアウグスティヌス『神の国』におけるユリアヌスへの論究も視野に入っており, ギリシア教父としてのナジアンゾスのグレゴリオスにとどまらず, ラテン教父としてのアウグスティヌスにとっての視点をも示唆することで, ギリシア・ラテン両キリスト教圏域の全体的な普遍的連携性を以てユリアヌスを駁す努力が明確化されてゆく.

ここからは、中西の著書の読了によって触発された評者なりの解釈になるが、キリスト教側から眺めた場合、ユリアヌスとは、理想のギリシア文化世界を個人的に想い描くとともに人工的な儀礼宗教機構を設定することで森羅万象を調和させようとする壮大な愚行を試みた異教徒として位置づけられるのであろう。ユリアヌスの儀礼的な人工システムとは、超越的な宗教性というよりは、現世的な状況の枠内での綺麗な絵空事の実現を個人的な意図で推し進めた結果として世に出た儚い抵抗の痕であったのだろう。

ともかく、ユリアヌスの人生遍歴と、その敵対勢力としてのキリスト教的ローマ帝国の現状との闘ぎ合う迫真の時代を歴史学や文献学や精神思想史の観点から立体的かつ総花的に幅広く描き切った中西の力技には驚嘆させられた。編年のな歴史的文献学の成果と共時的な構造論としての諸宗教の対決の横断図とが矛盾することなく見事なまでに一冊にまとまっている。齟齬の軋みや記述の矛盾・競合は一切ない。その点が、まことに藝術的である（中西は詩人でもあり、神話的な世界観の理解者でもあるから独自の直感的感性を備えているのだらう）。

ただ一つだけ難色を示すとすれば、ユリアヌスが活躍した当時の民衆レベルのキリスト者たちの反応が一切描かれていないことが不可思議であった。なぜならば、ユリアヌスが結果的に当時のローマ帝国で理解されず、歓迎されたわけではなかった一因として、民衆レベルの反発もあっただろうことは想像に難くないからである。もちろん、厳密な文献学的な記録として民衆の想いが残っていないことが大きな原因ではあるだろう。

しかし、アナル学派をはじめとする心性史の研究成果が多数積み重ねられてきている昨今の学術界において、その方面のアプローチにも果敢に挑戦して欲しかったと願うのは、おそらくは評者のみに留まらないだろう。しかしながら、我が国では、やはり、心性史的なアプローチの仕方は、未だ傍流とされており、学位論文の制作過程においては危険な手法であることは十分に推測できるのだから、中西を責めるわけにはゆくまい。ただ、優れた研究上の力量のある中西に対しては、評者は、やはり期待してしまうのだ。それゆえ、ユリアヌスを受容する側の心性史的研究に関しては、今後の愉しみとしよう。

なお、話題はいささか飛躍するが、最近刊行された添谷育志『背教者の肖像——ロ

ーマ皇帝ユリアヌスをめぐる言説の探究』(ナカニシヤ出版, 2017年), もまた古今東西のユリアヌス像を総ざらい俯瞰しつつ新たに解釈し直すという認識論上の自己改訂の試みを手法として開発したという点においては興味深い一書である。

中西の場合はユリアヌスの人物像を決して定義づけなかったのだが(その仕儀に、研究者としての慎重さと正確さが備わっている)、最終的に添谷の場合はユリアヌスのことを「リベラル・アイロニスト」として定義づけている。つまり、自由主義的な諧謔者(皮肉屋)とでも訳せようか。それにしても、「リベラル・アイロニスト」という言い回しは、一筋縄では評せないユリアヌスの哀しき人生の歩みと、奇妙なまでに捻じ曲がった思考経路を垣間見せてくれるようで、斜に構えて人生を絶えず疑って慎重にかつ大胆に斬るという独自の態勢を見事に言い当てているのではあるまいか。中西の文学的な芳香に満ちた文献学の由緒正しさと、添谷の適確な定義力とはユリアヌスの人物像の複雑な現実を立体的に解き明かしてくれているのである。

こうして、辻邦夫・中西恭子・添谷育志という稀有な三者の研究成果は、まさに、いま流行の映画上演の際の技術としての3D的なユリアヌス像の現代への興味深く圧倒的な照射として評者の心に映じてやまないのである。血湧き肉躍る、冒険ものとしての読書の愉悦に祝杯を挙げようとするのは、果たして、独り、評者だけののだろうか……。

(阿部仲麻呂)